レイナルド・アーン

Reynaldo Hahn

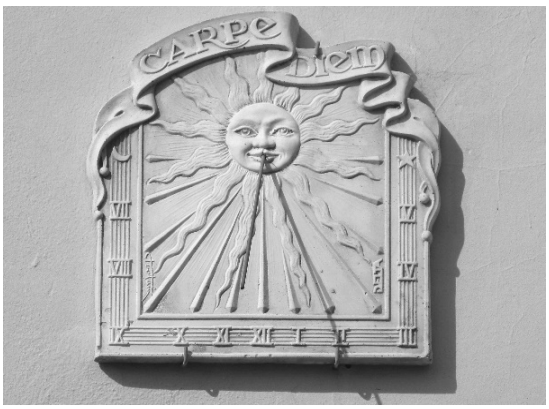
（1875 – 1947）

・ラテン礼賛

1. リュディア　　2. ネアエラ
3. サリナム　　4. タリアルコス
5. リュデー　　6. お飲みください
7. テュンダーリス　　8. フォロエー
9. フィデュレー　　10. フュリス

「ラテン礼賛」Etudes latines はルコント・ド・リール『古代詩集』(1852 年）中の一章。主に古代ローマの詩人ホラティウスの『歌章』(Carmina)に基づく 18 の詩篇を一章にまとめたもので、「軽妙瀟洒な中年の恋や人生の無常をホラチウス風に模作した小品」(森英樹)。ホラティウスの詩はきわめて高度な詩法によっており、翻訳はまず不可能とされます。おそらくド・リールは、そのホラティウスのラテン語の詩をフランス語の詩に作り替えることを通じて、古典の精神、古典の技法に学ぼうとしたのでしょう。その意味でこの Etudes は、ラテンの詩の研究であり、それを通じての研鑽であり、古典の普遍性に到達せんがための習作、ということになるでしょうが、ここではひとまず慣例に従い「ラテン礼賛」の訳題をあてることにします。

この「ラテン礼賛」からレイナルド・アーンは 10 篇を選んで、歌曲集《ラテン礼賛》(1900) を編みました。歌曲集といっても、曲ごとに求められる歌手は異なり、さらには第 1、第 4、第 9 曲では合唱が用いられます(2022 年 12 月 24 日のコンサートでは、合唱は第 1、第 9 曲のみ）。



「その日の花を摘め」Carpe Diem の文字が刻まれた日時計。この言葉はホラティウスの『歌章』Ⅰ.11 による。「……明日という日に、ゆめ信をかけずに、この日の花を摘めよ。」(藤井昇訳)

この曲集の導きの糸は、酒、恋、そして「その日の花を摘め」(Carpe Diem)。人生の短いこと、人の世の無常なこと、過ぎた時の還らぬことをわきまえ、明日を思い煩うことなく、今日という日を存分に楽しむべきだ、酒を飲もう、老いぬうちに恋をしよう、ただし節度と倹しさを忘れずに――というわけです。

Etudes latines

Leconte de Lisles

1. Lydie

La Jeunesse nous quitte, et les Grâces aussi ;
Les désirs amoureux s'envolent avec elles,
Et le sommeil facile. À quoi bon le souci
    Des espérances éternelles ?

L'aile du vieux Saturne emporte nos beaux jours,
Et la fleur inclinée au vent du soir se fane :
Viens à l'ombre des pins ou sous l'épais platane
    Goûter les tardives amours.

Ceignons nos cheveux blancs de couronnes de roses;
Buvons, il en est temps encore, hâtons-nous :
Ta liqueur, ô Bacchus, des tristesses moroses
    Est le remède le plus doux.

Enfant, trempe les vins dans la source prochaine,
Et fais venir Lydie aux rires enjoués,
Avec sa blanche lyre et ses cheveux noués
    À la mode Laconienne.

ラテン礼賛

ルコント・ド・リール／大棟幸太郎訳

1. リュディア

若さは我々から去ってしまう、〈優雅さ〉もまた。
狂おしい恋心も、それらとともに飛び立ってしまう、
そして安らかな眠りも。気に病んで何になろう、
    永遠を望んでも仕方がない。

老いた〈農耕神〉の翼が我らの美しい日々を運び去り、
花は夕べの風に吹かれて萎れる。
おいで、松の木陰か、厚く茂ったプラタナスの下に、
    遅咲きの恋を味わいに。

我らの白髪を薔薇の冠で飾ろう、
飲もう、まだ時間はある、急ぐのだ。
おまえの酒は、おお〈酒神〉よ、陰気な悲しみに効く
    この上なく優しい薬だ。

酌童よ、酒を近くの泉水で割ってこい、
そして朗らかに笑う遊び女リュディアを呼びに行け、
象牙でできた竪琴を持って、髪を
    ラコニア風に束ねてくるように、と。

※ 第 1 曲の詩のもとになったのはホラティウスの『歌集』２・11。「束の間を楽しめ」。

・**農耕神**……サトゥルヌス。農耕をつかさどる神は、時をつかさどる神としてもとらえられた。翼のある姿で描かれることもある。

・**「酒を近くの泉水で割ってこい」**……古代ローマでは葡萄酒は水かお湯で割って飲んだ。ホラティウスの詩では、この酒は「ファレルヌム」。甘口の、かなり強い酒で、当時の最高級ワイン。

CD［Maguelone MAG111.109］ブックレットより。

2. Néère

Il me faut retourner aux anciennes amours :
L'Immortel qui naquit de la Vierge Thébaine,
Et les jeunes Désirs et leur Mère inhumaine
Me commandent d'aimer toujours.

Blanche comme un beau marbre, avec ses roses joues,
Je brûle pour Néère aux yeux pleins de langueur ;
Vénus se précipite et consume mon cœur :
Tu ris, ô Néère, et te joues!

Pour apaiser les Dieux et pour finir mes maux,
D'un vin mûri deux ans versez vos coupes pleines;
Et sur l'autel rougi du sang pur des agneaux
Posez l'encens et les verveines.

2. ネアエラ

私は過ぎし日の恋に帰らねばならぬ。
〈テーバイの乙女〉から生まれて不死となった者が、
そして、若き〈欲望〉たちとその情け知らずの〈母〉が、
私に命ずるのだ、永遠に愛することを。

美しい大理石のように白く、薔薇色の頬をして、
眼に愁いをたたえたネアエラに、私は恋こがれている。
ウェヌスがとびかかり、私の心を蝕んでいるのだ。
おまえは笑う、おおネアエラ、そして戯れる！

〈神々〉を鎮めるため、私の苦しみを終わらせるために、
[召使たちよ、]二年ものの葡萄酒でお前たちの杯を満たせ。
そして子羊の清い血で赤く染まった祭壇に、
香とクマツヅラの香木を捧げよ。

※ もとになったホラティウスの詩は『歌集』1・19。

・**「ネアエラ」**……ホラティウスの詩では「グリュケラー」。ド・リールはこれを「ネアエラ」に変更している。「ネアエラ」はよくある名前で、ホラティウス以外に、ウェルギリウス、ティブルスなども恋人の名前として使っている。

・**「テーバイの乙女から生まれて不死となった者」**……酒の神バッコス（デュオニソス）。バッコスはテーバイ（テーベ）の女王セメレーとゼウスとの間にできた子どもで、最初から神だったわけではないが、最終的には神々の仲間入りをして「不死」となった。

・**「若き〈欲望〉たちとその情け知らずの〈母〉」**……エロース（キューピッド)たちとウェヌス。エロースたちはウェヌスの子。ウェヌスは美神であると同時に愛の神。弓矢を持ったエロースたちとセットで描かれることが多い。

・**「〈神々〉を鎮めるため」**……かつての恋人ネアエラへの想いがいまさらのように燃え上がるのは、バッコスやエロースやウェヌスの仕業である。したがってこの恋の苦しみから逃れるためには、これらの神々を供物によってなだめねばならない。

・**「二年物の葡萄酒」**……香や生贄とともに祭壇に捧げる「お神酒」。清酒でなければならない。

・**「お前たちの杯」**……詩人は、自宅の奴隷たち（複数）に祭壇に供え物をせよと命じている。ネアエラ（この場にはいない）に命じているのでないことに注意。

・**「クマツヅラ」**……ウェヌスにゆかりのある植物(ウェヌスのハーブと呼ばれた)。

3. Salinum

Il est doux de garder sur sa table frugale
La salière antique, et d'aimer le sommeil,
Et de ne fuir ni soi ni sa vie inégale,
　En changeant toujours de soleil.

Le souci, plus léger que les vents de l'Épire,
Poursuivra sur la mer les carènes d'airain;
L'heure présente est douce: égayons d'un sourire
　L'amertume du lendemain.

La pourpre par deux fois rougit tes laines fines;
Ton troupeau de Sicile est immense; et j'ai mieux:
Les Muses de la Grèce et leurs leçons divines
　Et l'héritage des aïeux.

3. サリナム

気持ちのよいものだよ、質素な食卓の上に
古びた塩入れ［サリナム］があって、心地よく眠れて、
自分からも、波乱に満ちた人生からも逃げださず、
　　住む場所をやたらと変えずに暮らすのは。

思い煩いというものは、エピルスの風よりも軽いのだから、
青銅の衝角をつけた船も、海の上で追いつかれてしまうだろう。
今こそ時は麗しい。微笑みによって和らげよう、
　　明日という日の苦しみを。

君は、紫貝で二度染めした高価な羊毛の衣を着ていて、
シチリアに膨大な牛の群れを持っているが、私のほうが上だ。
私にはギリシアの〈ミューズ〉たちとその神聖な教えがあり、
　　それに祖先たちの遺産があるからね。

※ ホラティウスのもとの詩は『歌集』２・16「心の平安」。ルコント・ド・リールの詩は三連からなるが、アーンは第二、第三連のみに作曲している。参考のため第一連の対訳も掲げる。

・**「塩入れ」**……タイトルの Salinum のこと。銀製の小さな塩入れで、家宝として受け継がれた。「唯一の贅沢」の意味もある。

・**「エピルス」**……地名。イオニア海沿岸の地域。

・**les carènes d'airain** ……軍艦の衝角（青銅でできている）。転じて軍艦。古代ローマの軍艦はガレー戦で、大勢の漕ぎ手を乗せているため速度は大きい。それでも思い煩いには追いつかれてしまう、という意味か。

・**「君」**……シチリアの大地主ポンペイウス・グロスフスなる人物。詩人はこの人物に、贅沢を求めて気苦労をせず、質素に穏やかに暮らすべきだと語りかけている。

・**「紫貝で二度染めした」**……大地主の衣服が二回もアフリカの紫貝で染められた高価なものであることを示している。

・**「ギリシアのミューズたちとその神聖な教え」**……ホラティウスは古代ギリシアの詩に学びつつ、ラテン語で詩作した。この詩をつくる力が、先祖伝来のわずかな遺産とともに、自分の生活を豊かで平穏なものにしてくれる、と詩人は述べている。ちなみに、ホラティウス自身の詩は、「（ギリシアの詩歌が）俗悪な世相を軽蔑する心を私に備えてくれている」で終わる。

※ アーンの曲は詩のテーマを反映して簡素に書かれている。歌と絡む笛の音のような単旋律は、シチリアの大地主ポンペイウス・グロスフスの象徴か。とすればこれは、詩人と、もの言わぬ笛との対話。

4. Thaliarque

Ne crains pas de puiser aux réduits du cellier
Le vin scellé quatre ans dans l'amphore rustique;
Laisse aux Dieux d'apaiser la mer et l'orme antique,
Thaliarque! Qu'un beau feu s'égaye en ton foyer!

Pour toi, mets à profit la vieillesse tardive:
Il est plus d'une rose aux buissons du chemin.
Cueille ton jour fleuri sans croire au lendemain;
Prends en souci l'amour et l'heure fugitive.

Les entretiens sont doux sous le portique ami;
Dans les bois où Phoebé glisse ses lueurs pures,
Il est doux d'effleurer les flottantes ceintures,
Et de baiser des mains rebelles à demi.

4. タリアルコス

気兼ねせずたっぷりと汲むがよい、酒蔵の片隅の
鄙びた酒甕から、四年ものの葡萄酒を。
風に荒れる海と楡の古木を鎮めるのは〈神々〉に任せておけ。
タリアルコスよ！美しい炎がおまえの炉端で華やぐように！

おのがために役立てよ、老境が訪れるまでの時を。
道ばたの茂みに咲く薔薇は一輪だけではない。
おまえの花開く日を摘むのだ、明日など信じるな。
恋と、過ぎ行く時を気にかけよ。

語らいを楽しむのに柱廊の影はうってつけだ。
森には〈ポイベー〉［月］の清らかな微光が差している、
そこで楽しむのだ、［乙女らの］緩められた帯に手を触れ、
抗うふりをする手に口づけするのを。

※ ホラティウスのもとの詩は『歌集』1・9、「春の訪れ　タリアルクスに」。ホラティウスの詩の中でも名唱の一つ。六連からなり、最初の二連は古代ギリシアの詩人アルカイオスの詩を模して書かれているが、ド・リールの詩ではこの箇所は大幅にカットされている。

・**タリアルコス Thaliarque** …… 田園詩や喜劇の詩女神である Thalia からの造語で、「祭りの主催者」(男性)を意味する。

・**「〈神々〉に任せておけ」**…… 外は嵐で、海は荒れ狂い、楡の木も烈しく風に揺れているが、それをなだめるのは神々に任せておいて（悪天候を気にしてもしかたがないので)、暖炉のある暖かい部屋で酒を飲むがよい。

・**「おまえの花開く日を摘むのだ」**…… 「咲いた花を、それがしぼまぬうちに摘むように、今日という日を摘め［楽しめ]」。ホラティウス『歌集』1・11 には次のように述べられている。Carpe diem quam minimum credula postero (明日のことはできるだけ信用せず、その日の花を摘め)。

・**「〈ポイベー〉の清らかな微光」**……ポイベー Phoebé はギリシア神話に登場するティーターン神族の女神。「輝ける女」の意味。ここでは月の光か。「陽も暮れて月明かりに包まれた森には、(柱廊の陰と同様) 恋人と過ごすのに適した場所がある」と詩人は語っている。

※　アーンのこの曲はガブリエル・フォーレに献呈された。

ガブリエル・フォーレ

5 . Lydé

Viens! C'est le jour d'un Dieu. Puisons avec largesse
Le Cécube clos au cellier.
Fière Lydé, permets au plaisir familier
D'amollir un peu ta sagesse.

L'heure fuit, l'horizon rougit sous le soleil,
Hâte-toi. L'amphore remplie
Sous Bibulus consul, repose ensevelie:
Trouble son antique sommeil.

Je chanterai les flots amers, la verte tresse
Des Néréides; toi, Lydé,
Sur ta lyre enlacée à ton bras accoudé
Chante Diane chasseresse.

Puis nous dirons Vénus et son char attelé
De cygnes qu'un lien d'or guide,
Les Cyclades, Paphos, et tes rives, ô Gnide!

Puis, un hymne au ciel étoilé.

5. リュデー

おいで！　今日は〈神〉の日だ。気前よく汲もうじゃないか、
酒蔵に寝かせたあのカエクバムの酒を。
誇り高いリデよ、くつろいで楽しむために
少しばかり緩めておくれ、きみの思慮分別［かしこさ］を。

時は逃げていく、水平線は夕日に赤く染まっているぞ、
ぐずぐずするな。あの甕に酒を注いだのは
ビブルスが執政官だった年で、以来、埋もれて眠っている。
そのいにしえの眠りをかき乱すとしよう。

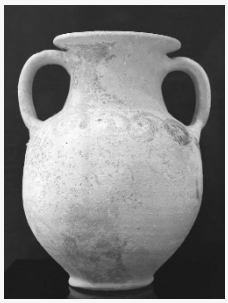
私は歌おう、塩辛い波［海］を、緑の髪の三つ編みにした
海の精ネレイスを。リュデーよ、きみは
肘をついた腕に抱えた竪琴に合わせて
歌いたまえ、狩りの女神ディアナを。

それから二人して語ろう、ヴェヌスを、ヴェヌスの戦車を
牽く白鳥たちが黄金の手綱に御されているのを、
キクラデスの島々を、パフォスを、それにきみの岸辺もだ、
おお、グニデスよ！

そして最後に、星空への讃歌を歌おう。

※ この詩のもとになったホラティウスの詩は『歌集』3・28「ネプテュナリアの祭」。

・**〈神〉の日**……海神ネプチューンを祭る日。7 月 22 日。



・**カエクバムの**酒……古代ローマで人気のあったワイン。

・**甕 emphore** ……アンフォラ。左右に取っ手のついた素焼きの容器。古代ローマでは酒をはじめさまざまなものを保存・運搬するのに用いられ、大型のものは遺灰を入れる容器としても使われた。

・**ビブルス**……マルクス・カルプルニウス・ビブルス(紀元前 103?-紀元前 48)。共和政ローマの政治家、軍人。カエサルの政敵。紀元前 59 年に執政官（コンスル）の地位にあった。古代ローマでは、ある年を示すのに「〇〇が執政官だった年」という言い方をした。

・**塩辛い波**……海。転じて海神ネプチューン。ネレイス（複数形はネレイデス）は海の精でネプチューンの娘たち。この日は「ネプテュナリアの祭り」なので、まずは海神と娘たちを自分が歌おう、ということ。その次にリュデーがディアナを歌い、そのあとは二人で一緒にヴェヌスを歌おう、と詩人は提案している。

・**キクラデス、パフォス、グニデス（クニデス）**……ヴェヌスゆかりの地。

白鳥たちが牽くヴェヌスの戦車。

6. Vile potabis

Dans mes coupes d'un prix modique
Veux-tu tenter mon humble vin?
Je l'ai scellé dans l'urne Attique
Au sortir du pressoir Sabin.
Il est un peu rude et moderne :
Cécube, Calès ni Falerne
Ne mûrissent dans mon cellier ;
Mais les Muses me sont amies,
Et les Muses font oublier
Ta vigne dorée, ô Formies!

6. お飲みください

私の安物の杯から
私のつつましい葡萄酒を試してみませんか？
この酒は私がアッティカの壺に入れたもので、
葡萄はサビーナの搾り機で搾りました。
少々粗くて、まだ年月も浅いのですが、
カエクブムも、カレースも、ファレルヌムも
うちの酒蔵には寝かせていないものですから。
でも、詩神たちが私の友です、
そして詩神たちが忘れさせてくれるのです、
フォルミアエの丘の黄金の葡萄棚を！

※ ホラティウスのもとの詩は『歌集』1・20、「マェケナスへの招待状」。マェケナスはホラティウスが世話になった政治家で、文芸の庇護者。ホラティウスの詩にたびたび登場する。[☞ 第 10 曲] ルコント・ド・リールの詩には名前が出てこないが、「飲みませんか」と杯を勧められているのはマェケナス。

・**サビーナの搾り機**……ホラティウスは庇護者マェケナスからサビーナの農園や屋敷を与えられ、そこで生活していた。ただ、サビーナの酒は古代ローマではあまり評判がよくなかった。詩人が「つつましい葡萄酒」と言っているのはそのため。

・**カエクブム、カレース、ファレルヌム**……いずれもワインの銘柄。ファレルヌムは古代ローマではワインの最高のブランド。

・**フォルミアエ**……ラティウム南部の町。カエクブムの葡萄酒はラティウムで栽培された。なお、ホラティウスはカエクブムをカレースやファレルヌムよりも好んでいたが、そのカエクブムをも、ミューズたち（詩人に霊感を与える）は忘れさせてくれる、と言いたいのであろう。

7. Tyndaris

Ô blanche Tyndaris, les Dieux me sont amis :
Ils aiment les Muses Latines;
Et l'aneth et le myrte et le thym des collines
Croissent aux prés qu'ils m'ont soumis.

Viens ; mes ramiers chéris,
aux voluptés plaintives,
Ici se plaisent à gémir ;
Et sous l'épais feuillage il est doux de dormir
Au bruit des sources fugitives.

7. テュンダーリス

おお、白きテュンダーリスよ、神々が私を護ってくださる、
我がラテンの詩神たちを神々は愛しておられるのだから。
丘のヒメウイキョウ、ミルト、タイムが
豊かに育つ牧場も、神々が私に与えてくださったもの。

おいで！　我が愛しのモリバトたちは、
嘆き呻くのが悦楽で、
この牧場ではしきりに啼いている。
それに、深い草むらのもとで眠るのは快いものだ、
うつろう泉の水音を聞きながら。

※ ホラティウスの原詩は『歌集』一・十七。もとの詩は七連からなるが、ド・リールはそのほんの一部しか活用していない。原詩は、遊女テュンダーリスを、詩人の別荘を見下ろすルクレーティリスという山に招くために歌ったもの。

・**「神々が私を護ってくださる」**……「(牧神をはじめとする)神々が私を守ってくれている。それは、私の敬虔さ、私の詩神を、神々も喜んでくださっているからだ。だから、私の別荘のある山には、豊かで安全な田園が広がっている。ぜひいらっしゃい」と詩人はテュンダーリスを誘っている。

8. Pholoé

Oublie, ô Pholoé, la lyre et les festins,
Les Dieux heureux, les nuits si brèves, les bons vins
Et les jeunes désirs volant aux lèvres roses.
L'âge vient : il t'effleure en son vol diligent,
Et mêle en tes cheveux semés de fils d'argent
La pâle asphodèle à tes roses!

8. フォロエー

忘れるがよい、フォロエーよ、竪琴と宴を、
幸福な神々を、疾く過ぎし夜々を、良い葡萄酒を、
そして、薔薇色の唇に飛びつく若々しい欲望を。
歳をとったのだ。それは飛び去りがてらお前に触れて
結び合わせる、白いものの混じるお前の髪の中で、
青ざめたスイセンと薔薇の髪飾りを！

※ ホラティウスの『歌集』3・15 では、年増女クローリスが「年相応に振るまいなさい」と揶揄されており、そのクローリスの娘としてフォロエーの名が出てくる。Joseph Vianey は、ド・リールが登場人物の名前を入れ替えた上で『歌集』3・15 をもとにこの詩を書いたと推測している (Joseph Vianey: *Les sources de Leconte de Lisle*) 。

・**「青ざめたスイセン」La pâle asphodèle** ……古代ギリシアでは、死ならびに冥府と結びつく花で、墓地に咲くとされる。ホメロス『オデュッセイア』第 11 書にオデュッセウスが冥府を訪れる場面があり、asphodèle が一面に咲く場所が出てくる。呉茂一訳では「極楽ゆりの原」、訳注によれば「青白い花を開く冥界の植物。にら、ねぎの種類で　長い茎と葉を有するという。」

・**「薔薇の髪飾り」tes roses** ……おそらくフォロエーは若づくりして薔薇の花を髪飾りにしているのであろう。その髪にはすでに白いものが混じり始めており、それが薔薇に混じった極楽ゆりを思わせる、ということかと思われる。なお、第 1 曲〈リュディア〉では「我らの白髪を薔薇の冠で飾ろう」と歌われている。

9. Phidylé

Offre un encens modeste aux Lares familiers,
Phidylé, fruits récents, bandelettes fleuries;
Et tu verras ployer tes riches espaliers
    Sous le poids des grappes mûries.

Laisse aux pentes d'Algide, au vert pays Albain,
La brebis qui promet une toison prochaine
Paître cytise et thym sous l'yeuse et le chêne ;
    Ne rougis pas ta blanche main.

Unis au rosmarin le myrte pour tes lares
Offerts d'une main pure aux angles de l'autel,
Souvent, ô Phidylé, mieux que les dons plus rares,
    Les dieux aiment l'orge et le sel.

9. フィデュレー

捧げるのだ、慎ましい香を家の守り神たちに、
フィデュレーよ、新鮮な果物を、花で飾った帯を。
そうすれば、やがておまえの豊かな葡萄棚は
    熟した葡萄の房の重さに撓むことだろう。

アルバの山々の緑野、アルギドゥス山の坂にいる
雌羊は、遠からず羊毛をもたらしてくれるのだから、
柊樫や樫の下で金雀枝やタイムを食ませておけ、
    おまえの白い手を生贄の血で染めるな。

ローズマリーとともにミルトを、守り神たちのために
捧げるのだ、清らかな手で、祭壇の四隅に。
たいていは、フィデュレーよ、貴重な贈り物より
    ［質素な］麦と焼き塩を神々は好むのだから。

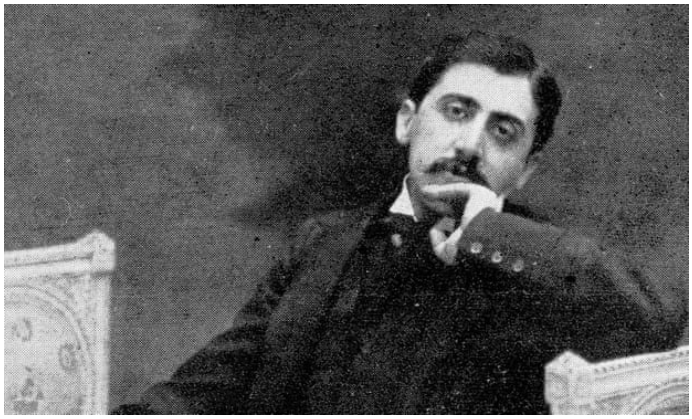
※ ホラティウスのもとの詩は『歌集』３・23、「捧げ物より捧げる人　フィデュレー宛」。

・**家の守り神 Lares familliers** ……古代ローマでは新月の日に家の守り神に供物をささげる習慣があった。

・**フィデュレー**……質素な田舎娘。ホラティウスの家の召使いか、あるいは近所の主婦。この名前は、ギリシア語の「倹約」を意味する「フェイドー」からの造語。

※ アンリ・デュパルクに、ド・リールの詩で書かれた同じタイトルの歌曲があるが、これは『古代詩集』の別の詩によるもの。

※ この曲はマルセル・プルーストに献呈された。



マルセル・プルースト

10. Phyllis

Depuis neuf ans et plus dans l'amphore scellé
Mon vin des coteaux d'Albe a lentement mûri ;
Il faut ceindre d'acanthe et de myrte fleuri,
　Phyllis, ta tresse déroulée.

L'anis brûle à l'autel, et d'un pied diligent
Tous viennent couronnés de verveine pieuse ;
Et mon humble maison étincelle joyeuse
　Aux reflets des coupes d'argent.

Ô Phyllis, c'est le jour de Vénus, et je t'aime !
Entends-moi! Téléphus brûle et soupire ailleurs !
Il t'oublie, et je t'aime, et nos jours les meilleurs
　Vont rentrer dans la nuit suprême.

C'est toi qui fleuriras en mes derniers beaux jours.
Je ne changerai plus. Voici la saison mûre.
Chante ! Les vers sont doux quand ta voix les murmure,
　Ô belle fin de mes amours !

10. フュリス

9年も前に封をした甕の中で
アルバの丘の葡萄で作った私の酒がじっくりと熟した。
葉飾りとミルトの花をめぐらせなければ、
　フュリスよ、おまえのほどかれた三つ編みに。

アニス香が祭壇で燃え、急ぎ足で
皆がやって来る、敬虔なクマツヅラの冠をつけて。
そして私の質素な家は喜ばしげに輝く、
　銀の杯の照り返しで。

おおフュリス、今日はヴェヌスの祭りの日、愛している！
お聞き！テレフュスは他所で胸を焦がし嘆息している！
彼は君を忘れ、私は君を愛している、私たちの善き日が
　この至上の夜に戻って来るのだ。

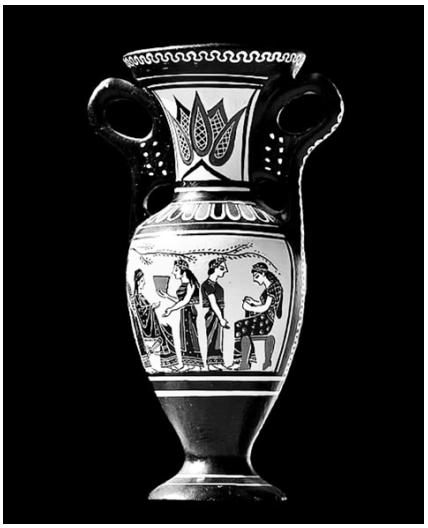
君なのだ、私に残された麗しい日々の中で花開くのは。
私はもう変わらない。成熟の季節［とき］が来たのだから。
歌え！　君の声で呟くと、詩は甘く優しく響く、
　おお、我が恋の数々の、なんと美しい結末！

※ ホラティウスのもとの詩は『歌集』4・11「誕生日の祝い」。詩人の庇護者マェケナスの誕生日が、たまたまヴェヌスのお祭りの日(4月13日)と重なっており、その日に隣人のフュリスという女性を自宅に招くという詩。ルコント・ド・リールの詩には出てこないが、ガイウス・キルニウス・マェケナス（紀元前70-紀元前08年)は政治家でアウグストゥスの腹心。すぐれた外交的手腕の持ち主であったが、文芸の庇護者としても知られ、ウェルギリウスやホラティウスを支援した。「メセナ」はマェケナスの名に由来する。

・**神聖なクマツヅラの冠**……クマツヅラ verveine はヴェヌスにゆかりのある植物(ヴェヌスのハーブと呼ばれた)で、愛を呼び起す力を持つと考えられていた。[☞ 第２曲]

・**質素な家**……第３曲〈サリナム〉、第９曲〈フィディレ〉を参照。詩人は慎ましい暮らしで満足している。

・**テレフュス**……ホラティウスの詩では「君がこころに掛けているテレフス君は、君などとは身分の違う青年だが、金持ちのあるふしだらな娘が彼に夢中になり、甘い彼女の足枷に男を縛りつけている。」と書かれている。



※ 解説・対訳の無断転載を禁じます。

［解説: 近藤秀樹］